

中山下り戸塚（春日町）

多紀（たき）郡畑村の城主、畑彦兵衛、弟の若太夫（わかだいふ）の兄弟は、波多野一族に加わって、明智光秀（あけちみつひで）の軍勢と戦いました。ふたりの戦いぶりは、目ざましいものでした。ところが、城内に敵の忍（しの）びの者が入りこんで火を放ったため、城がもえあがり、負けいくさになってしまいました。

兄弟は、夜のやみにまぎれて脱出しました。そして諸国をわたりあるきました。

数年後、兄弟はやはり丹波（たんば）がこいしくなり、ふたりの足は自然に丹波の方へむかいました。

なつかしい多紀の三岳（たけ）が見える氷上（ひかみ）の大路谷と三井庄谷が出会うあたりの野原までやってきました。

あたり一面にはすすきがおいしげり、やわらかい秋の日ざしに、すすきの穂（ほ）が光っています。

ふたりは、野原に腰をおろして、すんだ秋空にそびえる三岳をなつかしくながめました。

「兄上、かような所に、おちついて住むのも、悪うはござらぬな。」

「うむ、どうせ故郷（くに）には帰れぬわれわれだ。あの山をこえればすぐ畑村だ。このあたりなら故郷のうわさも聞けるだろうな。」

「兄上、さいわいここは良い土地、このかや原を切りひらこうではありませんか。」

「そうだな、どうせ、二君に仕える気もない。刀を鋏（くわ）にかえるのもおもしろい、よしやろう。」

こうしてふたりは、この地を開くことにし、開墾（かいこん）を進めていきました。

このあたりの土地は、南にあたる中山と、北側の鹿場、両部落の共同所有地で、草かり場となっていました。村人はあまり気にとめない土地でした。ですから兄弟が開墾を始めたことを村人は知っていましたが、どうせそのうちあきらめて立ち去るだろうと思って、問題にしていませんでした。

ところが、もともと良い土地でしたし、水もゆたかな所でしたから、そのうちに立派な田になり、米や、作物がとれはじめました。それを見た両方の部落では、兄弟のことを問題にしはじめました。

そして、とうとうある日、両部落の庄屋が兄弟のところへ談判（だんぱん）にやってきました。

「誰にことわって、この土地を耕（たがや）した。もし、このまま百姓をつづけるつもりなら年貢（ねんぐ）を出せ。」というのです。美田になってからの話に腹をたてた兄弟は、庄屋を追いかけました。

村人たちは、言うことを聞かないなら実力で追い出せ、抵抗（ていこう）するなら、やっつけてしまえーと、夜、手に手に、えものをもって、おしよせてきました。兄弟はこれを防ぎましたが、夜のことであり相手は多勢、兄の彦兵衛はとうとう中山村の下り戸で討たれてしまいました。

若太夫は危くのがれましたが、兄が討たれたと聞いて、となりの袖津村の村上一党の加勢を得て、袖津村の筆端山にたてこもりました。

両方が、それぞれ人数をそろえて、相対しました。十日近くたって、しびれをきらした、中山、鹿場勢は、さきに攻めよせてきました。

若太夫は、兄のとむらい合戦とばかり、得意の強弓をもって、進んでくる中山勢をつぎつぎと射ちたおしました。その強弓と、勇ましさにおそれをなした寄手の中山勢は、逃げ帰ってしまいました。

このできごとは、すぐ村役人から亀山藩主に報告されました。その話を聞いた藩主は、若太夫の勇しさに感心して、

「若太夫の武勇に免（めん）じ、子孫（しそん）末世まで庄屋たるべきこと。」

という、約束の書付けを若太夫にあたえました。

若太夫は、その後兄と共に開いた美田を守りつづけ、村の庄屋としても人びとのためにつくしました。

今も中山下り戸に残る塚は、若太夫が、兄の最後の地に塚をきずいて、手あつく葬ったところといわれています。

兄弟が開拓（たく）したあたりは、今は一面立派な田になっています。

現在、春日町鹿場にたくさんある「畑」の姓は、若太夫の子孫であるといわれています。

